

## キリマンジャロ (5895m)

- 1.山行日 平成 24 年 7 月 5 日～15 日 (11 日間)
- 2.目的地 アフリカ・タンザニア キリマンジャロ
- 3.行程
- 7/5 成田 22:00 ————3:50 ドバイ 10:50 ———— 15:15 ダルエスサラーム 19:55 ————  
20:45 キリマンジャロ空港 ———— モシ「キアロッジ」(泊)
- 7/7 キアロッジ 8:00 ————10:00 マラング・ゲート 11:30 ————16:15 マンダラハット (泊)
- 7/8 マンダラハット 8:00 ———— 15:45 ホロンボハット (泊)
- 7/9 ホロンボハット 8:00 ————9:25 ゼブラロック ————11:05 マウエンジリッジ 11:45  
————— 13:30 ホロンボハット (昼食) (泊)
- 7/10 ホロンボハット 7:40 ————12:20 サドル (昼食) ————14:20 キボハット (泊)
- 7/11 キボハット 1:00 ————6:55 ギルマンズ P 7:10 ————8:55 ウフル P (頂上) ————  
ギルマンズ P 10:30 ————11:30 キボハット (昼食) 13:00 ————16:30 ホロンボハット
- 7/12 ホロンボハット ————マラング・ゲート ———— アルーシャ「マウント・メルーH」
- 7/13 タランギレ国立公園サファリ
- 7/14 アルーシャ ————キリマンジャロ空港 ————ダルエスサラーム ————ドバイ
- 7/15 ドバイ ———— 17:45 成田

4.随 想 平成 24 年 (2012 年) 7 月 5 日 22:00、成田空港を出発しキリマンジャロに向かう。いよいよ長年の夢がかなう日が来た。登山を始めて 45 年。その間 1987 年(39 歳)に国内の 3000M 峰 22 座を完登し、2002 年 (54 歳)には日本百名山を踏破した。次に立てたのは「退職したら区切りとして、人類発祥の地アフリカを訪れ、最高峰キリマンジャロに登る」という計画だった。私は今年 3 月で 41 年間のサラリーマン生活に終止符を打った。3 月下旬～5 月はモンスーンの影響で現地は雨季となり、キリマンジャロでは降雪が続き冬山に一変してしまう。すぐにでも行きたかったが、雨季が終わるのを待たねばならなかった。5 月に入りアルパインツアーサービス社のツアーに申し込む。

7 月 5 日 20:00 成田空港に集合。大阪から 2 名参加と言う事で、総勢 11 名のツアーとなった。男性 4 名、女性 7 名。若い人が 2 名であとは同年輩の人達だった。エミレーツ航空で一路ドバイへ。上海・カルカッタ上空を飛び、早朝 3:50 に到着。時差が 5 時間あるので約 11 時間のフライト。さすがにドバイ空港は大きくて端から端まで 2 キロもありそうだ。ここで次の出発まで 7 時間も待たされた。外へ出ることもできず、写真撮影も禁じられており、ただただお店をぶらぶらしたり、椅子で寝てるしかなく、退屈極まりなかった。10:50 タンザニアの首都ダルエスサラームに向けて出発し、15:15 に到着。ドバイとの時差は 1 時間なので約 5 時間半のフライト。また空港で 5 時間近く待たされて、国内線に乗り継ぎキリマンジャロ空港へ。空港周辺のロッジに着いたのは夜中の 11 時近かった。夕食として大皿に山盛りのパスタが出たが、皆疲れていて食欲も無く、早々に就寝した。

翌日は 6:30 朝食。バイキングではあったがタマゴ 2 個使ったオムレツが印象的だった。8 時出発。約 2 時間で登山口 (標高 1800m) に到着。あいにく雨が降ってきた。11:00 登山手続きを済ませ、ポーター頭ジョセフ以下数名の紹介があり、11:30 歩き始める。樹林帯の中の緩やかな道に行く。休憩時にマングースが近づいて来たりした。歩き始めて約 5 時間、雨もやみ樹林も開ける頃、最初の宿泊

地マンダラハット（2727m）に到着する。ダイニング用の小屋を中心に4～5人用の小屋が立ち並んでいた。中は二段ベットでマットが敷いてあるだけなのでシュラフを使う。夕食まで時間があつたのでクレーター跡を見に行く。台地からは今日歩いて来た樹林帯の全貌が見渡せて、その森の深さと広さに感激した。

二日目は6時起床。ポーターがお湯と洗面器を持って来たので顔を洗う。同時にコーヒーかティーが配られる。7時に食事を済ませ、8時に出発する。ひと登りすると大草原に出る。ギザギザなマウエンジ峰が姿を現し、奥に雪をいただいたキボ峰が目飛び込んで来た。キリマンジャロはスワヒリ語で“白く輝く山”という意味で、最高峰のキボ峰、マウエンジ峰、シラ峰の3つのピークからなっている。その姿を初めて見た記念に、ポーターのクリスピーとアントンの三人で写真を撮る。草原帯は緩やかな登り道が続きゆっくり歩いて行く。左右には様々な花が咲いていて疲れを癒してくれる。ここでは日本のように花によって咲く季節があるわけではなく、いつでも勝手に咲いているようだ。登山者やポーターと行き違う度に挨拶を交わす。“ジャンボ！・ジャンボ！”日本語では“こんにちは”という意味。日本の山と同じだ。いくつかの沢を横切って、ようやくホロンボハット（3720m）に到着する。広々とした緩斜面に山小屋が立ち並び、キボ峰が少し顔を出している。夜中に外へ出て見ると満天の星が輝いていた。その中に燦然と輝く南十字星を見つけた時は、赤道より南に居るんだと嬉しくなった。

三日目は高所順応のために、ホロンボハットに滞在し近くのトレッキングを行なう。8時に出発し、荒涼とした台地に行く。途中ゼブラロックと名付けられた縞模様の巨大な岩のところで休憩する。11時にマウエンジリッジと呼ばれる高台に到着する。眼下にはザ・サドルと呼ばれる砂と岩の世界が広がっていた。さえぎるものは無く、正面にキボ峰がその全容を見せていた。最後に登るルートがその厳しさを見せ付けていた。ポーターの入れてくれたコーヒーとクッキーを口にしながら重厚なキボ峰を眺めていると、まさにアフリカの山に来ているんだなという思いが込み上げてきた。しばし時間の経つのも忘れてしまう。40分程ぶらぶらして帰路についた。13:30にホロンボハットに着き、昼食のラーメンを食べ、午後はのんびり過ごした。

四日目は7:40に出発し急な坂を登って行く。登りきった丘からはキボ峰が指呼の間に横たわっていた。ジャイアントセネシオという一本の大きな菊の花が立っていて、キボ峰と見事な調和をかもし出していた。太宰治の「富士山には月見草が良く似合う」を思い出して思わずカメラのシャッターを押した。ここからキボ峰までの大砂礫帯はザ・サドルと呼ばれている。砂と岩の世界で、さえぎるものは何も無く、風が強かった。平坦な道だが標高は4000mを超えているので、高所に慣れるためにもゆっくり行く。“ゆっくり”はスワヒリ語では“ポレ”。ポーターからは常に“ポレ！・ポレ！”と声が掛かる。ザ・サドルを5時間くらい掛けて横断しキボハット（4703m）に到着する。

五日目はいよいよ頂上アタックだ。深夜1時に出発。ヘッドランプの明かりを頼りに砂礫のジグザク道を登る。すでに標高は5000mなので空気が地上の半分以下になっていて、数歩あるいては立ち止まりを繰り返していた。ポーターは“ポレポレ！”と声を掛けてくれる。砂礫帯が終わると今度は山頂直下の岩場に行く。途中で日の出を迎えた。東の方向、マウエンジ峰の左の方向の雲海が徐々に茜色に染まり太陽が顔を出す。アフリカの夜明けだ。しばしただずみ写真に収める。さらに進み岩の間を抜けるとギルマンズポイント（5685m）に到着する。目の前に飛び込んで来た火口の広さには驚いた。7時前に着き、体調も悪く無かったので、さらなる高みに向かってお鉢を回る。光度差200mあるアップダウンを進む。6000mに近いので空気が薄い。4,5歩あるいては立ち止まり、数回深呼吸し体内に空気を取り込む。これの繰り返した。山頂に近づくにつれ雪上を歩くようになった。途中、

階段状になった氷河があり、青白く輝いていた。初めて見た氷河に大感激。新聞にも報道されたことがあるが、地球の温暖化のために後退が進んでいるようだ。いつか無くなってしまうのだろうか？ついに 8:55 山頂ウフルピーク (5895m) に到達する。“CONGRATULATIONS!” のモニュメントが迎えてくれた。ここまでの道のりを振り返ると同時に、今、眼下にはアフリカ大陸が広がっており、その頂点に立っている事の感激を全身で感じる瞬間だ。ここに立てたのは 11 名中 4 名だった。“ウフル”とは“独立”を意味する言葉で、タンザニア国の独立を記念して命名されたそうだ。

帰路につく。ギルマンズポイントに 10:30 に戻る。すぐ岩場の下降を始め、砂礫帯に入る。登る時は苦しいジグザグ道だったが、今度は富士山の砂走りの要領で一気にキボハットまで下ってしまった。上り 6 時間、下り 1 時間。膝がガクガクし、途中何度も立ち止まって休んだ。キボハットに着いた時には茶色の靴が真っ白になるほど砂まみれだった。1 時間半程、休息と昼食を取り 13:00 にキボハットを後にする。相変わらず風邪が強いザ・サドルを渡り、往路をホロンボハットに下山する。この日は長い行動時間となった。

六日目はマンダラハットを経由し、登山口のマラングゲートに降りた。ポーター頭のジョセフから登頂証明書を授与される。そしてポーターが全員で、祝福と惜別の意を込めて「キリマンジャロの歌」を歌ってくれた。再び頂上に立った喜びが沸いてきた。高低差約 4000m、歩行距離約 100 ㎞を歩いたわけだ。生涯忘れることは無いだろう。(丁)







